

話題82 ティータイム(10) 老年医学への挑戦

老年医学への挑戦を試みて3年が経過した。まさしく未知の分野への挑戦であった。そもそも高齢者の定義そのものが曖昧である。65歳以上を前期高齢者、75歳以上を後期高齢者としているが、その根拠は明らかではない。暦の年齢と生物学的年齢にも乖離があり、一線を引くことはむづかしい。

地域の老人会の総会の計画があるとのことで講演の依頼を受けた。日頃の健康管理のあり方、健診の意義、思い出の患者さん等の話をつなぎ合わせて約1時間の講演をこなした。講演の後の質問からも、かなりの反応があることが分かった。

施設外での講演で十分な手応えがあったため、担当の施設に入所中の方々にも話すべきであろうと考え、機会をつくってもらった。意に反して、老健施設での講演は全くの無反応であった。

納得しました。そうなのです。施設に入所中の方々の約8割は認知症を合併しているのです。話の内容、話し方にそれなりの工夫が必要だったのです。

老健施設においては100歳以上の入所者が約1割を占める。キーパーソンが車椅子で訪ねて来られる光景もよく目にする。孫であることもある。

施設への入所時にはアンケート調査が行われる。病態が急変した際の処置、救急蘇生に関する家族の対応についてである。様態が悪化した際には、急性期医療を担う機関に転送するか、隣接する病院への転院でいいか、それとも当施設で静かに経過を看ていいのかの問いでもある。

意外に不思議なことは、あまり家族がそのことに関して、日頃から考えていないことにある(ティータイムに)。90歳、100歳にも届かんとする年齢であるが、今、現在は考えられないので、その時点で、医師と相談して決めますとの記載が目立つ。

言えることは、人は、常日頃から、「寿命」について、人間にも寿命があることについては考えておかないといけないのではないかと・・・。